

余部遺跡(その1)発掘調査概要

—府営余部南住宅建設に伴う発掘調査—

1998・3

大阪府教育委員会

はしがき

余部遺跡の所在する南河内平野では、関西空港へのアクセスとして開通した近畿自動車道松原すさみ線および府道松原泉大津線建設に伴う調査によって、多くの埋蔵文化財が明らかになり、またその内容についても従来の情報を補て余りある成果がもたらされたことは周知のところです。特に、河内鉄物師の伝承ともかかわる中世村落の様子を遺跡や遺物ではっきりと示し、中世の農業と手工業の生産活動の姿を身近に感じ取ることができました。

今回の調査は高度成長期の昭和30年代に建設された府営美原南余部住宅の建替えに伴って、同地の埋蔵文化財の内容を把握する目的で実施いたしました。調査の結果、中世村落の一画と農業用に水を供給していた貯水池が形づくられていく様子が分かりました。現在もまだ周辺に残る旧来の集落がどのように營まれてきたか、それを考えるうえで貴重なデータを得たと思います。この成果はこれまで積み上げられてきたこの地域の調査成果とあわせ、今後さらに詳しく検討される予定です。

これからも地元の方々、今回の調査にご協力いただいた関係機関及び地元の皆様に、今後とも本府文化財保護行政に対し、一層の御理解と御協力ををお願い申し上げます。

平成10年3月

大阪府教育委員会文化財保護課長

鹿野 一美

例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府建築部の依頼により府営美原南余部住宅建替えに伴い実施した余部遺跡（その1）の発掘調査概要報告書である。
2. 調査地は、大阪府南河内郡美原町南余部281番地外である。
3. 現地調査は、大阪府教育委員会文化財保護課調査第1係技師枡本哲、森屋直樹を担当者として、平成9年8月26日着手し、平成10年3月31日終了した。
4. 本書の執筆は森屋直樹、枡本哲が分担して行なった。

目 次

はしがき

例 言

本文目次

挿図目次

第1章 調査にいたる経緯と調査の結果

第2章 調査の方法

第3章 位置と環境

第4章 調査の成果

1. 基本層序

2. A～C区の遺構と遺物

3. D区の遺構と遺物

4. E区の遺構と遺物

第5章 まとめ

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図

第2図 調査区地区割り図

第3図 調査地周辺地形図

第4図 調査区土層図

第5図 A～C区遺構全体図

第6図 A～C区の出土遺物

第7図 B区柱列柱間計測図

第8図 A～C区土坑・溝・ほか

第9図 D・E区遺構全体図

第10図 D区旧河川および溝断面図

第11図 D区木柵出土状態図

第12図 D区南壁木柵部分断面図

第13図 D区小土坑遺物出土状態図

第14図 E区建物101平面・断面図

第15図 E区建物101柱間寸法

第16図 建物101ピット3柱根出土状態図

第17図 E区建物102平面・断面図

第18図 E区建物102柱間寸法

第19図 E区井戸228平面・断面図

第20図 E区井戸228出土土器類

第21図 E区井戸228出土木器類

第22図 E区溝230出土状態ほか

第23図 E区土坑132遺物出土状態図

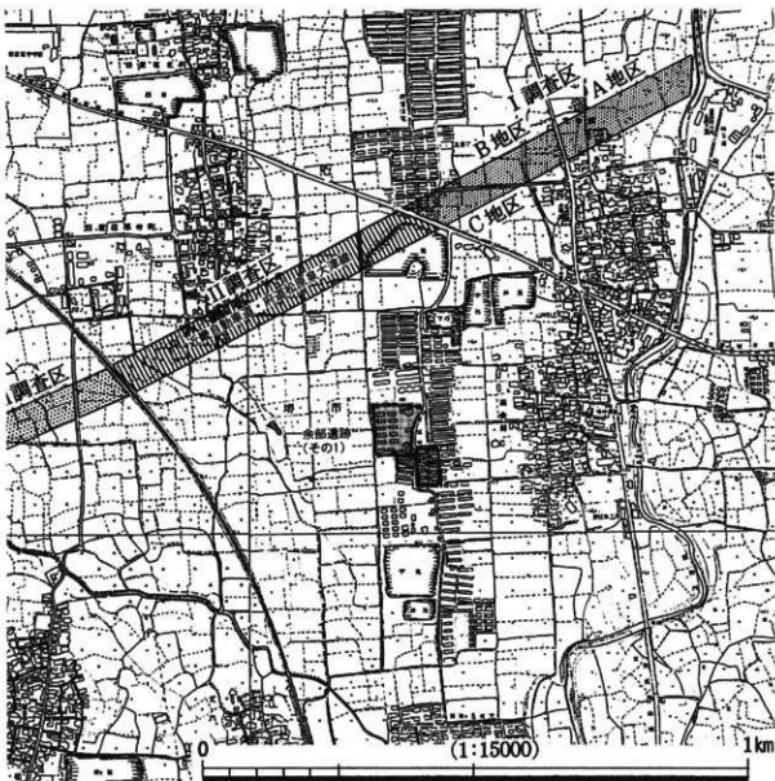
第24図 E区土坑203遺物出土状態図ほか

第25図 E区ピット遺物出土状態図ほか

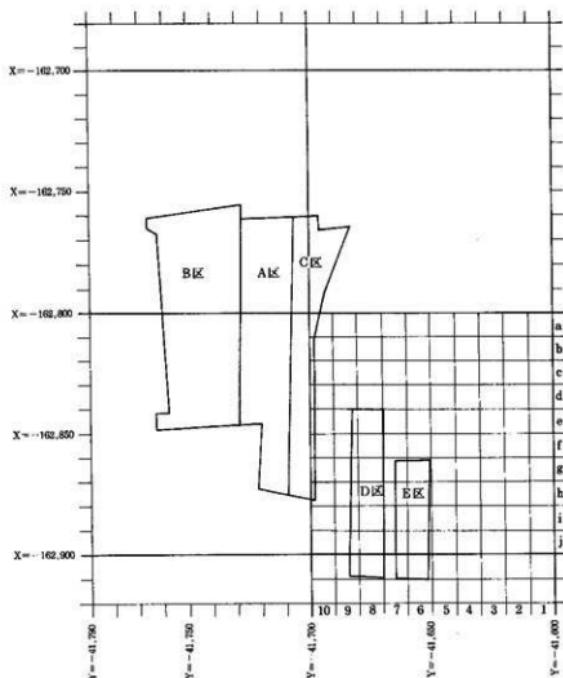
余部遺跡（その1）発掘調査概要

第1章 調査に至る経緯と調査の経過（第1図）

府営美原南余部住宅の一連の建替え事業は、既に10年にわたって逐次進められてきている。この事業地内の埋蔵文化財については大阪府建築部住宅建設課と協議を重ね、同課の依頼を受けて、まず平成元年度事業として同2年2月14日に本府教育委員会が試掘調査を実施し、事業地内全域の埋蔵文化財の存否を判断するデータを得た。この調査結果に基づきその後の調査の方向がつけられた。平成6年には大阪府教育委員会指導のもとに助大阪府埋蔵文化財協会が現中池北側の建替え部分の調査必要箇所4,400m²について発掘調査を実施し、古代～中世の遺構・遺物を検出し、当地点の埋蔵文化財の状況がさらに具体的に把握されるに至った。その後、平成7年4月から8



第1図 調査区位置図（『日置莊遺跡』（1995）図I-1を使用、加筆）



第2図 調査区地区割図 ($S=1/2000$)

年3月にかけての府営美原北住宅の建替えに伴い、汚水管埋設工事（今回の市道より東側のA区に相当）部分の調査が大阪文化財センターにより行なわれている。

以上の既往の調査結果を勘案して、今回は平成9年度事業として、平成6年度実施地点の北に隣接する約8,500m²を対象として実施した。調査地点は中央を南北に通る市道を挟んで大きく東西に分かれる形となり、建設工事に必要な進入路の工事が急がれる東側から調査を開始した。現地調査は平成9年8月中旬に機械掘削を始め、順次人力掘削に移り、遺構の検出を行なった後、11月に第1回目の航空測量を実施し東側の一部を残して調査を終了した。次いで西側での調査に入り、1月と3月に検出遺構の航空測量を行ない、3月末をもってすべての現地調査を完了した。

第2章 調査の方法（第2図）

調査は、住宅建設予定地を南北に通る市道を挟んで東西に分かれること、東側では南北中央道路工事が建設用進入路ともなるため、工事が先行して行なわれること、また西側では南北方向のガス埋設管が存在すること、などから調査対象面積を5区に設定して実施することとした。これ



第3図 調査地周辺地形図（大日本帝国陸地測量部 明治8年）

をA～E区と名づけた。なお、A～C区は工事の優先順位によって区別されたもので、実質的には同一調査区であるので、本文中ではA～C区として一括している。

調査は住宅撤去後の瓦礫、住宅建設時の盛土、その下の耕作土を機械で掘削した後、以下の中世遺物包含層を、遺構・遺物の検出に努めつつ、人力にて掘り下げた。遺物の取り上げや、検出された遺構の位置表示にあたっては、国土座標を基本に設定した10m区画を利用した。国土座標上の区画は、大E-5-16、H-I-17~18にあたる。

第3章 位置と環境（第3図）

調査区は、南余部の旧集落の西約300mの、西除川左岸の中位段丘面上に位置する。現状は府営美原南住宅敷地内にあり、それ以前は条里の地割りが良好に残る田畠であった。地目としては調査区南側に接して中池があり、さらに北500mには更池がある。池の一部は調査区北東から南西にかけて通る近畿自動車道の建設や、調査区南側の府営住宅建替えにあたって埋め立てられた。かつては中池の北、調査区との間に、昭和30年代前半に住宅建設に伴って埋め立てられ、現在はそこに新棟の高層住宅が立つ旧下池（併池）があった。高度成長期の30年代後半以降、特に住宅地確保のための埋め立てが進んだ経過のなかで、周辺の多くの池が旧地形の変化とともに消えつつあるが、この池もそのひとつである。

調査区周辺に広く目を向けると、東の羽曳野丘陵と西の陶器山丘陵との間の北に向かって扇状に開けた空間には、中央を南北に流れる西除川流域の東西に、狹山池方面から現状の河川網と、放射状に展開する多数の開析谷の埋没地形がうかがわれる。この埋没地形に沿う形で現在みると多くの池もしくは池跡が点在していた状況は新旧の地図に見いだされる。そして集落の多くがこれらの池に隣接して発達している。概ね南北に通るこのような旧開析谷の地形を東西に横切る街道（丹比道、大津道など）は、特に本調査区周辺の南北・東西に展開する条里の地割りに規制され、また一方上記の池についてもこの周辺で相対的に四辻を整えている。しかし旧集落の位置が池に隣接して、いわば池とセットになるかのように点在する景観は保たれている。このようなありかたはむろん南河内の平野部での農業の発達の必然性にかかわると思われる。そのような意味で本調査区は旧開析谷、つまり河川から池への土地利用上の変化を跡付ける作業を考古学的に検証するうえで興味深い地点と思われる。

第4章 調査の成果

1. 基本層序（第4図）

調査区全体にわたって府営住宅建設時の盛土がなされている。また調査開始時にはこの住宅撤去工事に伴う廃材を含む整地層がみられた。鉄筋コンクリート建物の基礎、排水管その他による擾乱も調査区全域に認められたが、とりわけA-C区に著しかった。以上の擾乱・盛土の下には

かつての田畠である耕土がある。耕土・床土の下には中世遺物包含層である灰褐色系の粘質土がある。しかしA～B区の特に西側ではそれが希薄で、耕土直下が地山の砂礫層となる。またB区西壁断面では南から北にかけて何枚かの田畠の削平段が現われている。

地山層は基本的に砂礫土と黄灰色粘土とからなる。堆積順序としては前者が先行し、その起伏面の窪地となった部分に後者が溜まっていたとみられる。東～北東へとこの地山が低くなるので、C区でも、特に北半部には中世包含層が比較的厚く堆積している。それ以前の包含層は、古墳時代前期の遺構が数ヶ所で検出されているにもかかわらず、部分的にせよ観察されなかった。中世とそれ以後の開発により削平されてしまったのだろう。このような作業が大規模に行なわれたためか、中世包含層の中からはそれ以前の遺物、特に旧石器時代のものと考えられるサヌカイト片、サヌカイト製石器の縄紋～弥生の遺物、さらに古墳時代の円筒埴輪片が、B区中央付近で検出されている。

市道を挟んだ西側のD～E区でも基本的には同じ過程を示す堆積層が認められる。この過程は数層の堆積層に混入した土器片によっておおよその時間幅を考慮できる。またE区南端では以上の基本堆積層のはかに、D区の埋没河川とその後それが池として利用されていく過程に連動すると思われる築堤盛土の堆積土の一部が観察される。

居住区域にあたるE区中央部を除くと、中世包含層出土の土器片は中世の耕作作業によるためだろうか、かなり磨滅したものが目につく。北半部では遺構がほとんど認められず、それに応じて包含層も希薄となる。

2. A～C区の遺構と遺物（第5図、6図）

古墳時代の溝、土坑、古代・中世の不定形落ち込み、溝、柱列、耕作溝、近世・近代の耕作溝、井戸などが検出された。

古墳時代前期

溝004 A・C区東半中央で南東から北西にかけて延びる。方位はN-45°-W、幅0.5～0.6m、深さ0.2mであるが、北西してやや幅広く、かつ浅くなる。A区に入ると2条の平行する形で検出された。埋土は灰褐色粘質土である。現地割りにのる東西方向の耕作溝に数ヶ所で断ち切られている。

C区のやや幅広になった個所から土器片が出土している。図上復元できるものはないが、布留式甕の口縁部片が認められる。

溝019 A区南端で検出された南東～北西に延びる溝である。中世以後の地割り線の方向とはまったく異なり、中世の開墾以前の旧地形に沿っている。方位はN-40°-W。

出土遺物は、摩滅した土器片数点で、器形は不明である。しかし前述した溝004や後述する

土坑の埋土・方向に近いので古墳時代前期にさかのぼる可能性は否定できない。

土坑014 B区南端で検出された不定形な土坑である。長軸は5.2mで、東西方向示し、短軸は2.8m、深さ0.32mを測る。埋土は9層を区分した。第2層には須恵器片を混入していたが、第3層以下、特に第6層を中心として布留式の甕口縁部、高杯脚部、裾部、小形丸底などの破片がみられた（第8図）。しかしいずれも細片のため図上復元できたものは少ない（1～3）。

古代～中世

溝037 B・C区北西部で検出された溝であり、南西から北東に延び、そこからはほぼ直角に北西方向に転じている。方位は南半部ではN-50°-E、北半部でN-20°-Wである。幅0.7～1.0m、深さ0.2～0.3mを測る。埋土は第1、2層が灰褐色系粘質土で、底面に堆積する第3層は砂もしくは砂が混じる粘質土である（第8図）。北部で溝040に断ち切られている。南部では050、039がこの溝の最終堆積時またはその後に流れ込んでいる。埋土の粘質土中から土師器把手付き鍋の把手部分、須恵器甕胴部片、瓦器碗底部片、サヌカイト片などが出土している。

細片とはいえ、他の遺構の出土遺物に比べてやや時期のさかのぼる土師器や須恵器が混入している点、遺構の方位が中世以降の遺構にみられる方向性とは明らかに違い、むしろ先の古墳時代の遺構の方向性に近い点から、少なくとも中世以前に掘込まれた可能性がある。

落ち込み C区東端中央にみられた東側への落ち込みである。北側が攪乱され、東側の調査区外に及んでいるので、形状・規模は不明である。埋土は暗褐色粘質土である。西側の肩部で流れ込む形で黒色土器が1点出土した。黒色土器はB類で、口径14.80cm、器高5.80cm、体部は直線的にのびる。内外面を密にミガキし、口縁部は横ナデによりやや外反気味となる。11世紀前半が考慮される（4）。

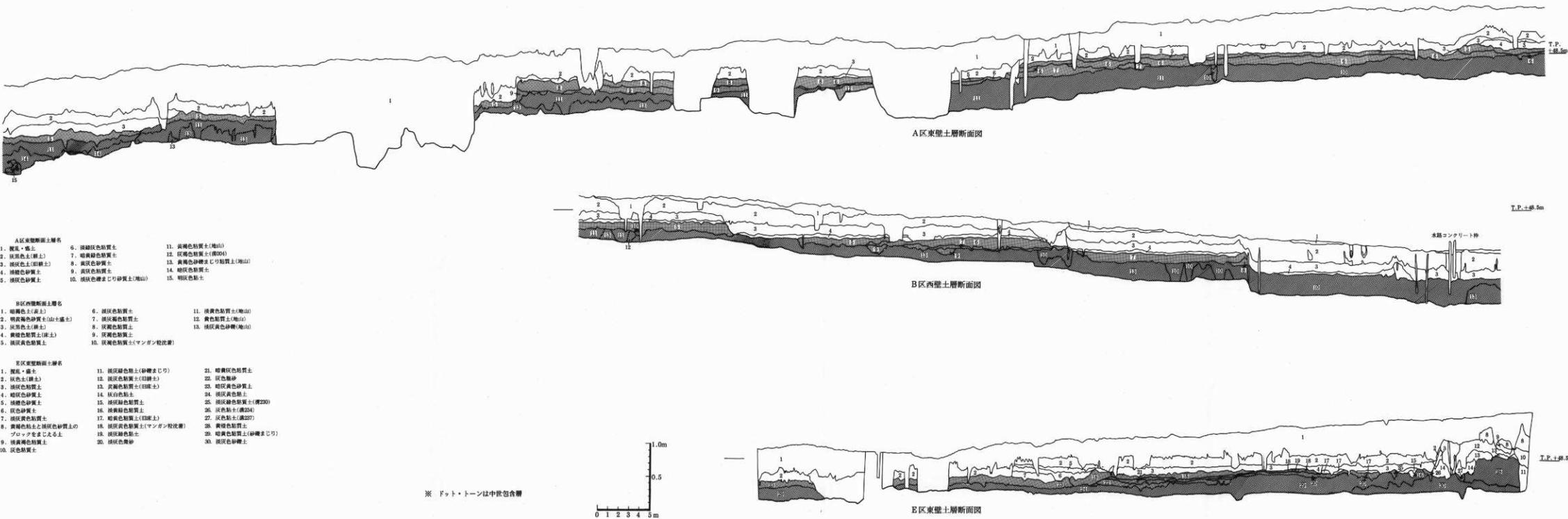
轍跡 A区中央で検出した細溝状の痕跡である。埋土はすべて明灰色の微砂で、鋭角に切り込む三角形の断面が特徴である。延長は長短あるが、2条一対となり、その間隔が1.3～1.4mとほぼ共通している。方向は南西～北東、東南～北西の2つに密集する傾向が認められる。切り合いも認められる。この方向は中世遺構の地割りに沿わないが、また一方で古墳時代の溝004を断ち切っている。

中世（第7、8図）

中世のものとみられる遺構の大半は耕作に関係する細溝である。その他には柱列、不定形土坑群などがある。各遺構の軸方向は現在の地割りとほとんど同じである。埋土はすべて中世包含層と同じである。したがって削平されずに残った中世包含層のあるところに東西溝、南北溝が比較的よく残っている。

柱列 B区南西端で検出した南北方向3列の柱列跡である。

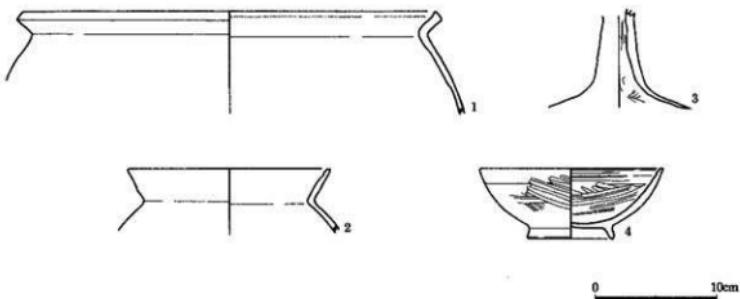
柱列A 延長19.3m分を検出した。方位はN-1°-W、攪乱坑で削平されたピットもあるが、



第4図 調査区土層図



第5図 A~C区構造全体図

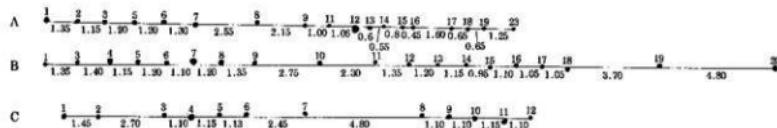


第6図 A～C区の出土遺物（1～3 B区土塙014, 4 C区落ち込み）

ほぼ等間隔（平均1.23m）を考慮して掘込まれた模様である。この等間隔から外れるピット（A-13、15、18、19）は掘り替え、補強などの柱穴と考えられるかもしれない。ピットの径は20～30cmが中心である。検出面よりの深さは4～22cm、底面の地盤高はT.P.48.10～48.19mを測る。埋土は淡灰褐色、やや灰色の強い粘質土を基本とする。出土遺物はない。

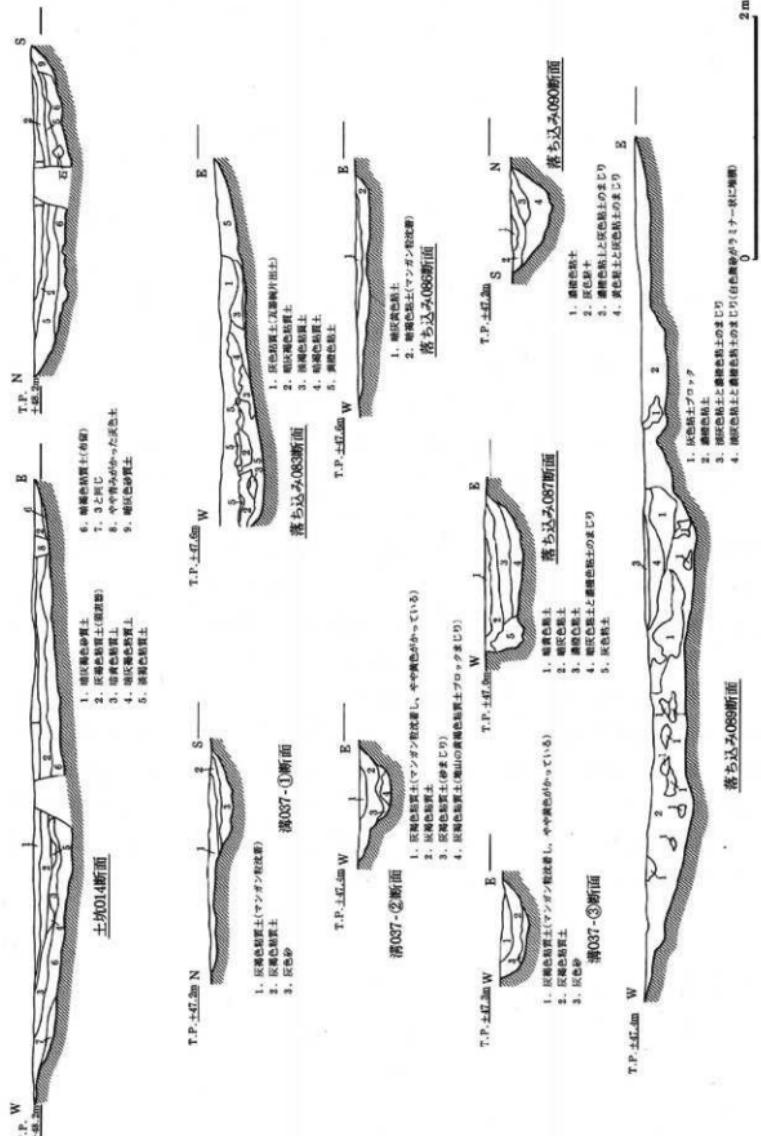
柱列B 柱列Aの東に1.6～1.7m隔てて検出した、延長21.5m分のほぼ等間隔のピット列である。さらに北の延長線上で2箇所のピット（B-19、20）が認められる。南から連続するピット群の間隔とは開きがあるので確定しがたいが、延長部分と考えておきたい。やはり擾乱坑により数ヶ所のピットが削平されている。B-10～11間にはピットの痕跡は認められなかった。掘込みが浅く、後世の開発で消滅したか、そうでなければ意識的に2柱間分を開けたままにしたかもしれない。方位はN-0.5°-Wで、柱間は平均1.19mを測る。B-6（調査時呼称番号015）の埋土中から土師器片2点が出土したが、細片のため器形はわからない。柱穴径は15～20cmで、埋土は柱列Aと同じく淡灰褐色粘質土である。深さは7～22cm、底面地盤高はT.P.48.11～48.16mを測る。

柱列C 柱列Bの東に約2.2m隔てて掘込まれたピット列である。延長19.2m分を検出した。方位はN-1.5°-W。ピットの形状、埋土は柱列Bと同様である。深さは7～18cm、底面地盤高はT.P.48.10～48.18mを測る。出土遺物はない。柱間は1.16mである。C-2～3間は2間分が空いている。C-7～8間は4.8m測り、ほぼ4間分となるが、擾乱、削平により消滅した



(単位m)

第7図 B区柱列柱間計測図



と思われる。

以上の柱列の時期については、出土遺物や、他の遺構との重複関係もみられず不明といわざるをえないが、埋土が中世包含層に似ているので、ここでは大まかに中世としておきたい。柱列の用途についても、周辺に建物を構成するようなピットその他の遺構がみられないで、積極的に柵列とする根拠もない。収穫物や藁を掛ける農業用の干し架と考えられないこともない。

不定形落ち込み群 C区北東部で不定形な大小の落ち込み群が密集して検出された。大きさは一定していない。埋土は灰色粘土と黄色粘土の混在する形を基本とし、通常みられるレンズ状堆積を示すものは少ない。時間を置かずに埋められた感じがする。この個所にみられたピットも掘立柱のそれとは明らかに違う比較的浅い潛り鉢状をなす。落ち込みには埋土中から瓦器片が出土したものもある(083、089)。この個所にこのような落ち込みが密集する原因のひとつとして、A区北端部からC区北端部にかけて北へ若干傾斜する位置であることが挙げられる。その低くなつたところに耕地確保のために削平した南側からの土を埋めた可能性がある。

3. D区の遺構と遺物（第9図）

検出されたのはこの調査区のはば全域を占める池跡、その堤、溝などである。

中世以前（第10図）

溝281 調査区中央の旧流路の東側岸で北東～南西方向に掘込まれた溝である。幅2.2m、深さ0.75mを測り、北東してやや浅くなる。埋土は13層に分層された。9層以下には砂の堆積が顕著であり、それ以上は粘土・粘質土が堆積する。流水のあった時期と埋没、沈滯する時期が反映しているとみられる。溝底に溜まった砂層（第13層）から土師器、須恵器の破片が出土している。堆積土全体には中世遺物はまったく混入しない。これは後述する中世の池の堆積層（つまり、流路の一連の堆積層のうちトーンで示された数層）に含まれる中世遺物の出土状況とは明らかに区別される。旧流路の堆積層のうち、中世遺物の混入がみられ始める第15層灰色粘土（北側横断面）以前の段階に流れ込んでいた溝と考えられる。溝の北東は調査区外に及んでいるが、東側のE区では検出されなかった。おそらくD区とE区の間を北東方向に通ると想定される。

旧河川 調査区のはば全域で南西～北東方向に検出された。流路幅は13m、深さは1.6mまで掘り下げた。堆積土は4つの横断面で10～15層を区分できたが、大きくは上層の粘土・粘質土（北壁断面第9、10層、北側断面第12～15層）と下層の粘土・砂（北壁断面第11層以下、北側断面第16層以下）に分けられる。上層が中世遺物を混入する池跡としてとらえられる。下層は河川堆積で、北半部の最下層より流木が出土した以外、ほかに遺物はなかった。

中世

池跡 中世以前の南北方向の流路の埋没過程を利用して、東西方向にこれを仕切って池としたも

のである。東西方向の仕切りは調査区南端で認められる堤状の盛土、それに沿う後世の杭列、東側の岸に沿って打ち込まれた杭列などで池としての形状が推し量られる。池としての利用を物語るに遺構として堤の盛土下で検出された木繩暗渠、盛土を施す前の儀礼的行為（土師器小皿の特徴的な出土状態－後述する小土坑252－）を挙げることができる。

池の堆積土は灰色～灰緑色系の粘土で、これが3～4層に分層され、各層には土師器、須恵器、瓦器、瓦、陶磁器の細片が含まれ、特にE区の建物等遺構検出個所に近い地点で多く検出された。瓦器碗・皿、瓦質羽釜・鉢類、土師器小皿、須恵器鉢、青磁・白磁碗・鉢類、瓦など中世遺物が圧倒的であるが、中世遺物に比べて摩滅の度合いが著しい須恵器杯蓋、甕など古代の遺物も小量含んでいる。これらの中世遺物の混入経路としては後述するE区検出の中世遺構群との関連がまず考えられる。全体的にみたこれらの遺物の時期は13～15世紀とみられる。

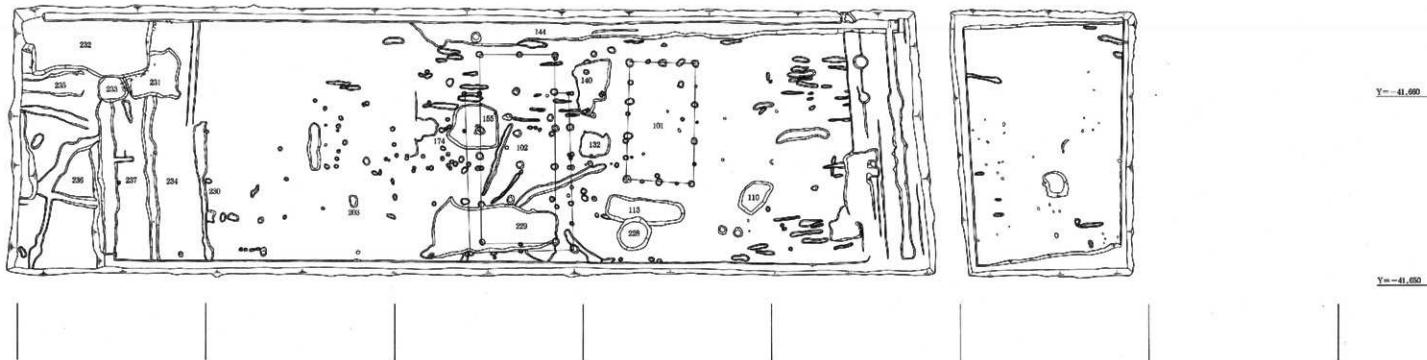
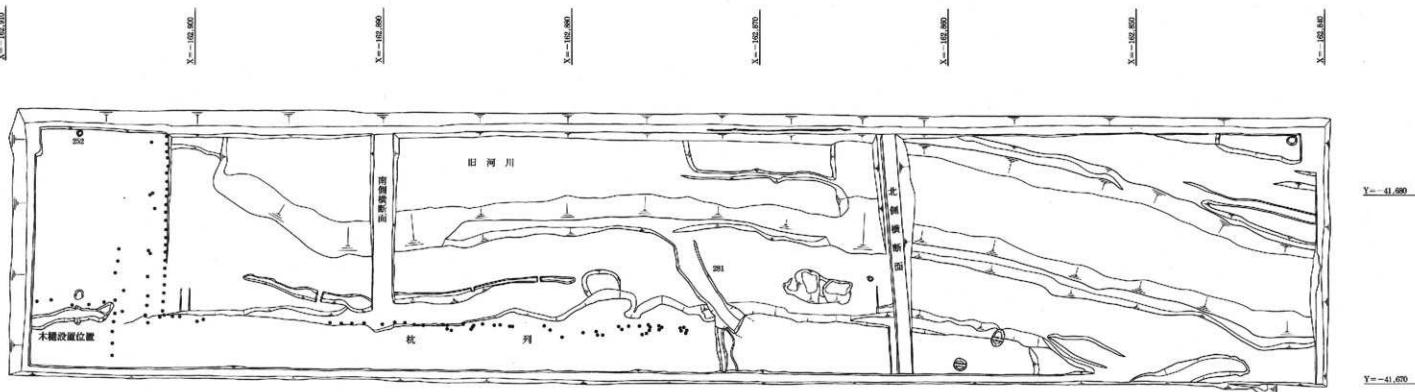
なお、この池の東西方向の堤の続きが1994年度の大坂府埋蔵文化財協会による調査で確認されている。

木繩（第11、12図） 調査区南端で南北方向に設置された状態で検出された。検出部分は3.6mで、南側は調査区外に及んでいる。南壁から北2.3mのところで幅0.2m、長さ0.8mのコンクリート基礎を据える際の掘削で断ち切られている。この基礎は木繩の検出されたほぼ同じ位置で、それより0.2mの上位レベルに埋設されたコンクリート管（径20cm）を支えるために設置されたものである。つまり、近代にも同じ位置に暗渠が設けられたわけである。

木繩の材質は径40cmのマツの樹幹を縦に半割りし、外皮から7～8cmの厚みを残して、芯材を手斧で削り取り、深さ9～10cmの平坦な底面を得て構の形に整えている。斧の削り痕は内面全体によく留められている。南壁より2.2mのところで繩に幅9cmの断面三角形の切り込みがつけられ、完全に切り離されず外皮で繋がっている。これは樹幹そのものの曲がりが平坦な設置面には不安定なため、地面に合わせて真直ぐ整えたと考えられる。南壁より0.35mのところでは繩の底面に径6cmほどの孔があるが、これは樹幹の節孔部分でこれに繩を詰めている。繩の北端は厚みがなくなり、側面がなく底面だけであるが、これは上記のコンクリート基礎設置工事の際損なわれたようである。

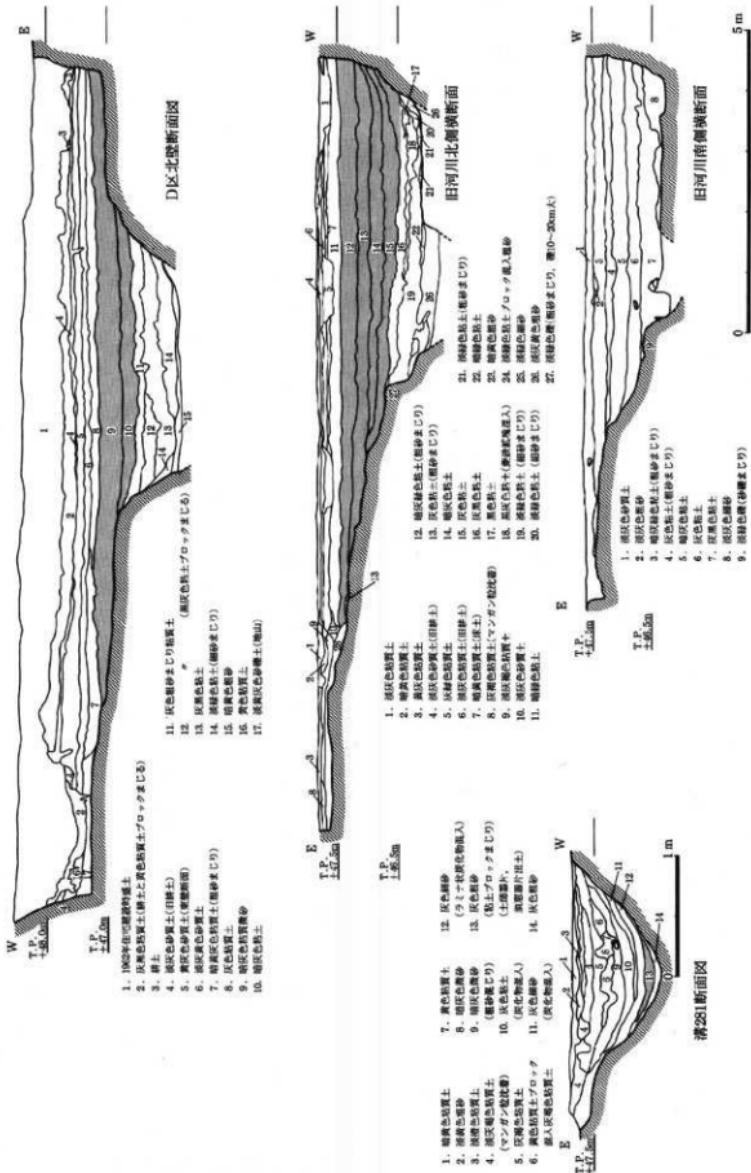
繩の被覆材は南壁から1.2m分が設置当初のまま残っていた。材は長さ0.32m～0.42mで、繩本体の幅に応じてその都度切り取ったのだろう。幅10cmのものは枝または樹幹の末の部分を半割りし、それより幅広のものは樹幹を適当に割り取っている。木繩の設置は池の南辺と思われる杭列より南1.6mで、池の南西部にある。繩の設置面より上には盛土がなされていること、前回の調査で堤の一部が確認されていること、それが今回の調査のこの位置に統くこと、ちょうどその位置でこの繩が検出されたこと、などから繩は旧地形図からも判明している南の池（現在新築高層住宅となっている）との間の堤下に埋設されたと考えられる。

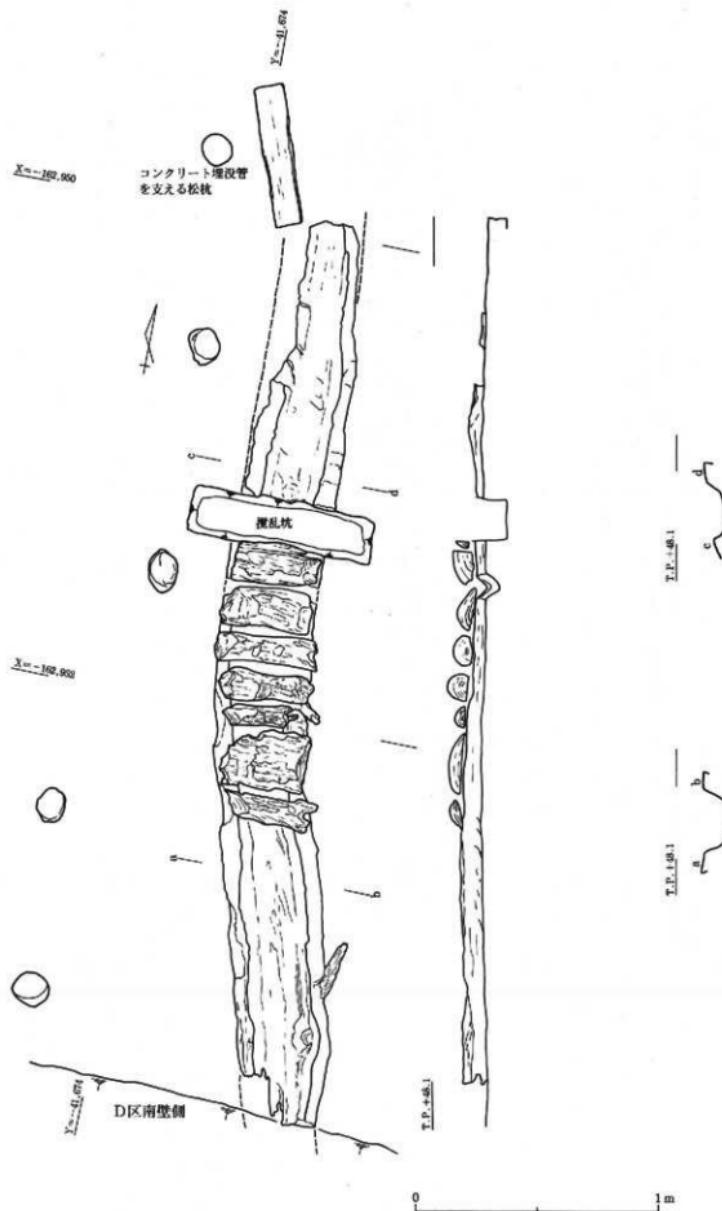
小土坑252（第13図） 調査区南西端で検出された径0.5～0.6m、深さ0.15mの浅い小土坑である。この土坑で土師器小皿計5点が南西から北東に流れ込む形をとて土坑肩部で検出された。



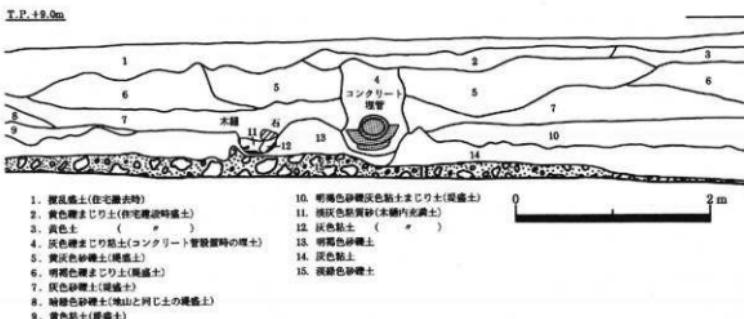
第9図 D・E区遺構全体図

第10図 D区旧河川および溝23I断面図（トーンは遺物出土層を示す）

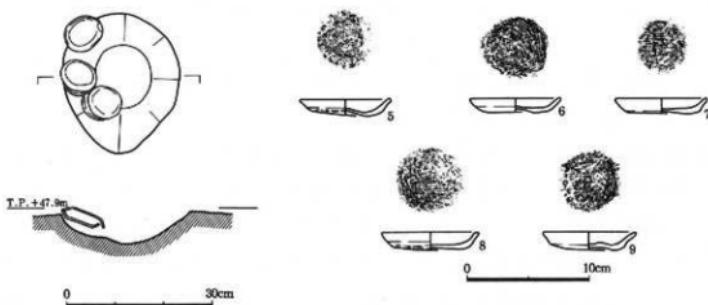




第11図 D区木桶出土状況図



第12図 D区南壁木樁部分断面図



第13図 D区小土坑252出土状況および出土遺物

うち4点は身と蓋用に2枚1対となって出土している。おそらく3対分計6点が本来一括埋納されたのかもしれない。皿の中には炭が残っていた。検出面は木樁と同じく流路最終堆積後の平坦面である。

皿はすべて、口径7.6cm、器高0.9cm、やや外反する口縁内外を横ナデし、底部外面は指オサエ、内面はハケ目を施して調整している。16世紀前半を考慮できよう。

中世以後

杭列 池の周辺に打ち込まれた杭で、東辺、南辺にみられる。南辺の杭は径10~20cmの材で、東西方向の3列が認められるが、もっとも北側の杭列は30~40cmの間隔をとって、T.P.平均47.2mまで打ち込まれている。長さは0.6~1.0mが残っていた。杭列の方向は座標に合致している。杭の設置時期は正確には分からぬが、近世~近代ではないかと思われる。

4. E区の遺構と遺物（第10図）

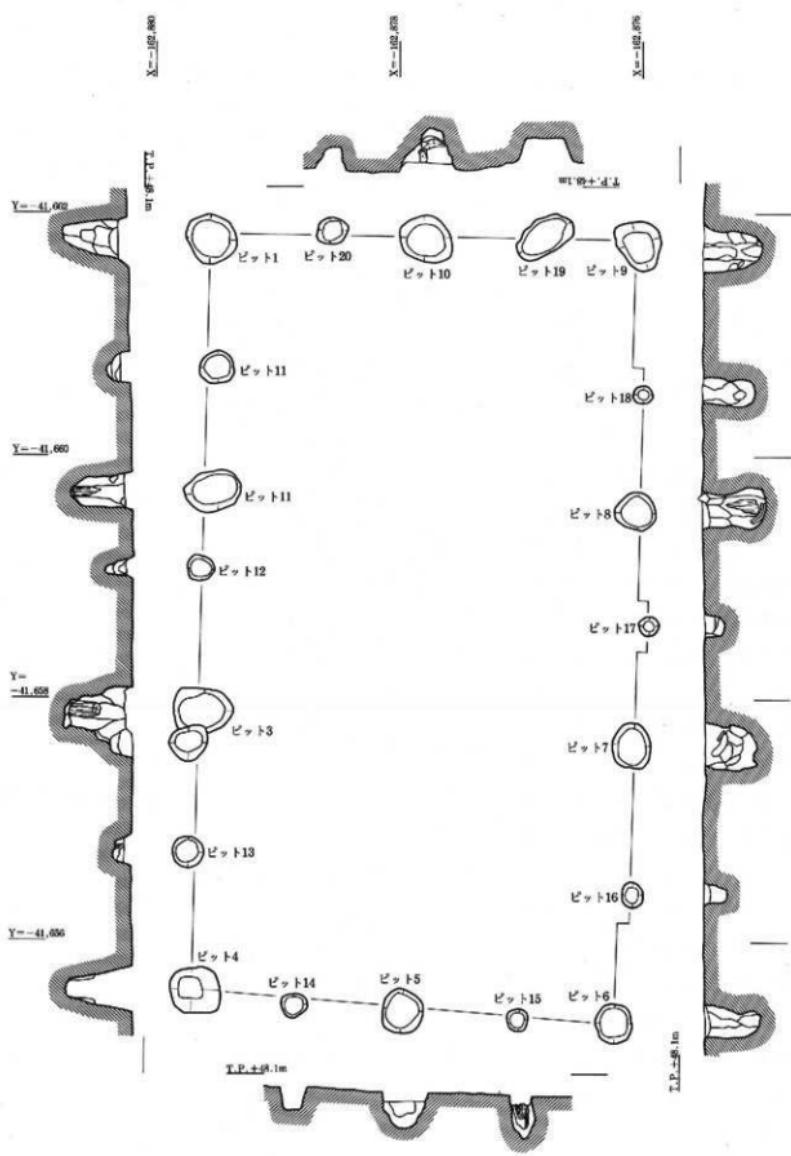
調査区中央と南半を中心として検出された建物、その他付属施設の痕跡と思われるピット群、溝、井戸、建物の廃絶に関係する土坑群などがある。建物、溝の方向は現在の地割りと大差ない。土坑は建物周辺にみられるものは大きく、離れたところにあるものは単独で小規模なものと、不定形で大きいものがある。

建物101（第14、15、16図） 調査区中央で検出した。南北2間（3.4m）×東西（6.0m）で、主軸方向はN-1°-Eである。東西列のピット2とピット3の間隔が他に比べて狭いが、その他は2.05m～2.3mで、平均2.17mとなる。南北列ともに間柱がある。面積は21.9m²。柱穴掘り方は0.26～0.46m、深さ0.50～0.55m、間柱は径0.18～0.46m、深さ0.16～0.43m。ピット2、3、5、8、13には柱根は残りがよく、根石をともなっている。ピット8では柱根下に2枚重ねで平瓦が敷かれていた。また柱根は腐っていても柱状に変色した土層を観察できたピットもある（ピット1、4、6、9）。その他のピットは瓦礫を投棄するなどして柱を抜き取った後の埋め戻し状態がみられた。

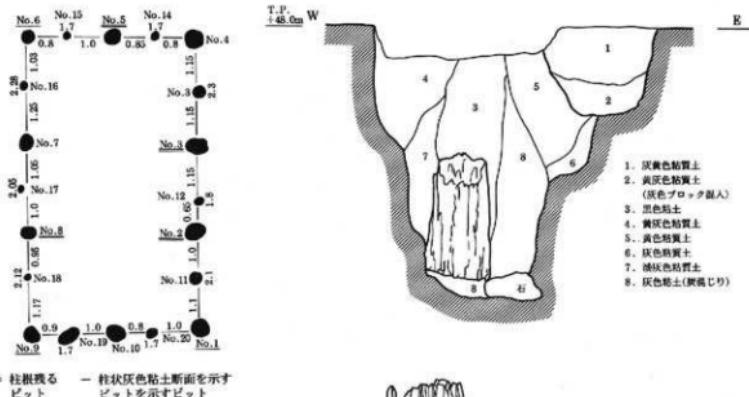
ピット3では柱根が正立状態で残っていた（第15図）。柱材は側面に6面以上の面取りをつけて縦に削られている。底面にも同様な削り痕が認められる。

建物102（第17、18図） 建物101の南に3.5m隔てて平行する形で検出された。南北2間（3.9m）×東西5間（10m）で、面積39m²。柱穴掘り方は径0.20～0.40m、深さ0.3～0.57mである。主軸方向は座標北に沿う。東西列の南辺と北辺に東5間分と南北列東辺に4箇所庇または塀の柱列が取りつくが、柱間は建物本体の柱間と対応せず、ややすれて配置される点が特徴的である。一部のピットを除き、柱根抜き取り後の埋め戻しがなされており、柱根の残るものはないが、柱状の灰色粘土が観察された。これらの埋め戻し土から瓦器、土師器などの破片が出土している。この柱列のうちピット18と19、ピット22と21の間のピットは土坑229を、またピット3、16は土坑155の坑底面で検出した。

井戸228（第19図） 建物101の東側で検出された。土坑113と重複し、この土坑の埋没後に掘込まれている。長径1.85m、短径1.65mのほぼ円形である。深さは検出面から2.46mの礫層まで掘削している。上半1mまではラッパ状に、それ以下はやや胴張り状に掘り下げ、底面は平坦である。埋積土は7層に分層できた。出土遺物は第3、6層でまとまった比較的完形に近い土器類の出土状態が観察できた。第1、2層は遺構検出面全体に被る中世遺物包含層の土質に近い。第3層の粘土層では瓦器、須恵器、瓦の破片が20～40cm大の石に混在して出土した。石の中には被火による黒変が認められるものもあり、粘土中に炭を混入することと相俟って、本層堆積の過程がそれより上位の層とは異なっていた状況がうかがわれる。黒変、煤痕のある石は西側建物101の柱穴埋土中からも出土していることや、これらの瓦礫の投棄が西側から行なわれたことは注目



第14図 E区建物101平面・断面図



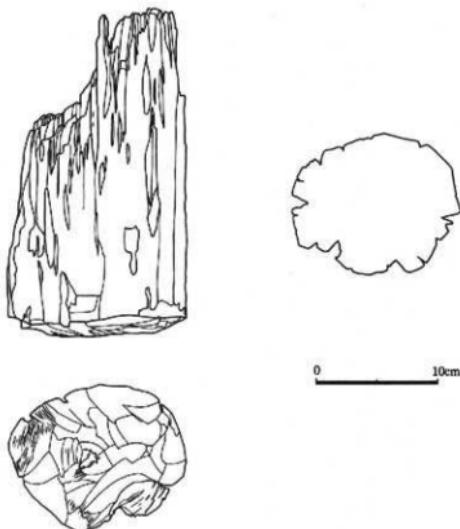
第15図 建物101柱間計測図

される。本層以下0.5~0.6mの砂質土または砂を混入する粘土の堆積を経て、層厚0.65mのきわめて軟質な灰黒色粘土に達する。この粘土層ではT.P.45.7~46.2mにかけて椀、皿を中心とする瓦器類、杓子他の木製品や木片が出土した。井戸底に溜まった層厚0.1~0.15mの砂は地盤の砂礫層から井戸の使用期間中に徐々に遊離して堆積したようである。したがってその上に堆積する粘土層の上記の廃棄物が井戸の廃絶し始める時期を示すと考えられる。

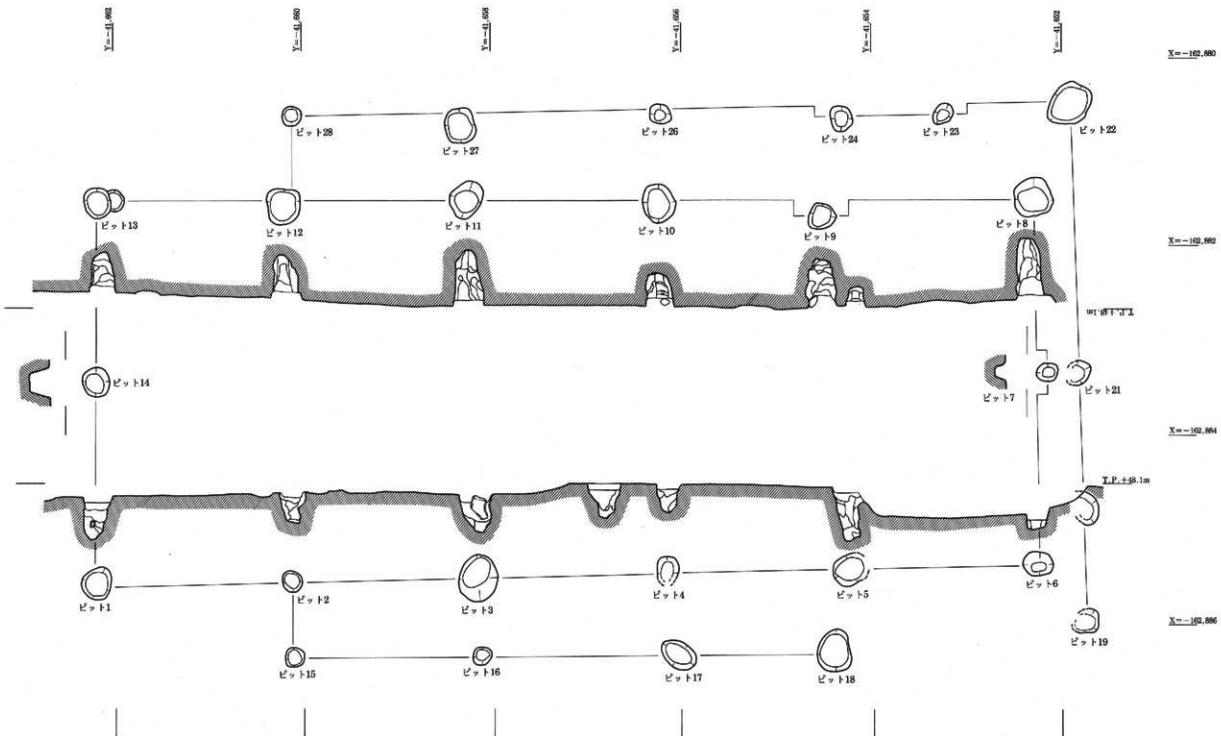
出土遺物（第20、21図） 井戸の堆積土中、第6層の灰黒色粘土より出土した土器類は今回の調査の中でも最も残存状態のよい完形に近いものが多い。特に第6層ではこれらの遺物を出土レベル毎に4回にわたって取り上げた。

T.P.46.864mでは12、13、20~24、T.P.46.214mでは14、T.P.46.024mでは15~17、T.P.45.742mでは18、19が出土した。

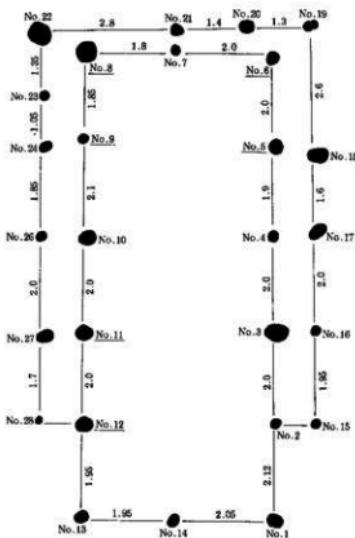
土器類では瓦器椀、皿、土師質羽釜鉢部、木製品では杓子、叩き棒などがある。また上層からも瓦片、瓦器、土師器などが出土している。



第16図 建物101No. 3 ピット出土柱根

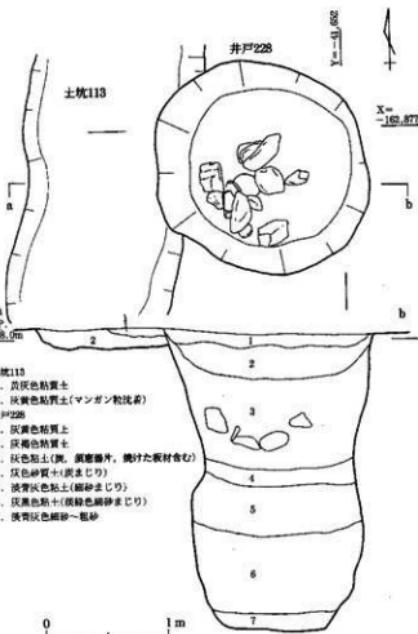


第17図 E区建物102平面・断面図



柱状灰色粘土断面を示すピット

第18図 建物102柱間計測図



第19図 井戸228遺物出土状況・断面図

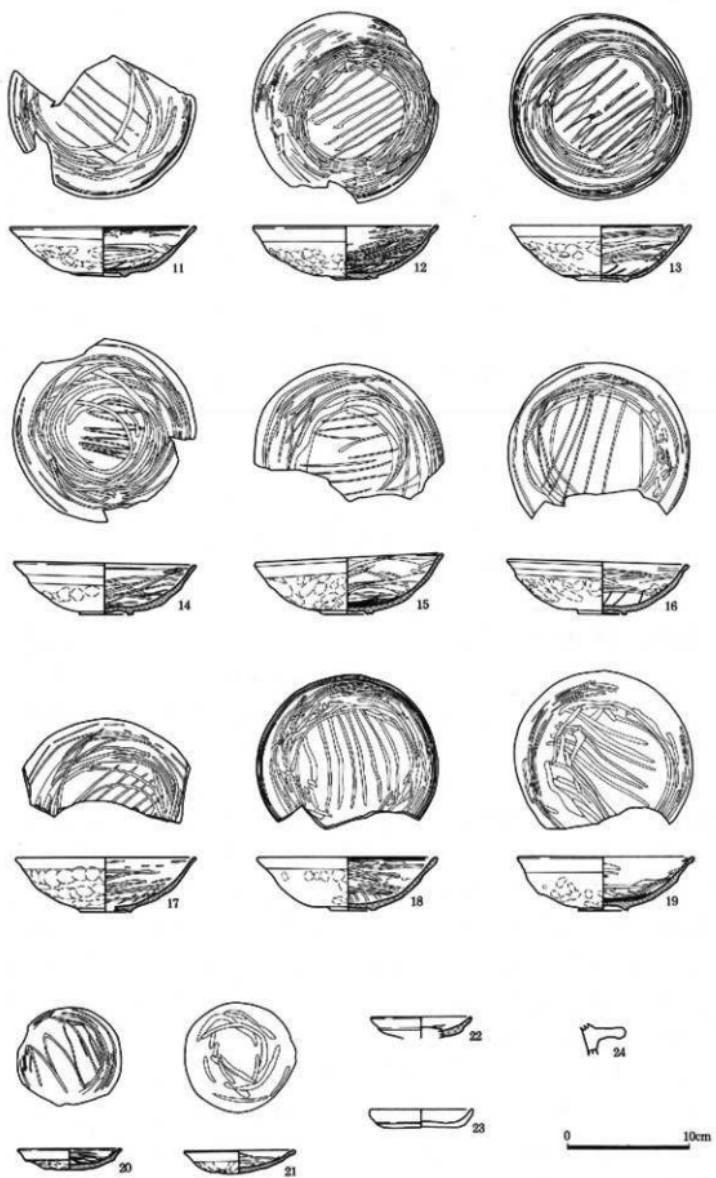
瓦器碗は内底面に粗い平行暗文、内面周囲に粗いミガキをかけるもので、皿にも内底面に平行暗文のあるもの（21）がみられる。土器小皿は体部一段ナデでやや内側に立ち上がるもの（23）。

木製品では杉材の杓子が第6層のT.P.46.214mで出土した。曲げ板の接合は桜樹皮を用いている。この接合部の側板中央に穿たれた孔から反対側の槽部下に柄が挿入されるつくりである。接合部の内側にあたる部分の柄には縦位に目釘孔がつけられている（25）。これとは別に同様の杓子の底板が出土している（26）。同層中、T.P.45.742mでは檼材と思われる叩き棒が出土している（27）。全体的に荒削りで仕上げ、柄と敲打部との境は段をつけている。柄の断面は面取りした円形となるが、敲打部は扁平な橢円形となる。半製品の状態かとも思われるが、ここでは便宜的に叩き棒とした。なお、敲打部の先端は欠失しているようである。

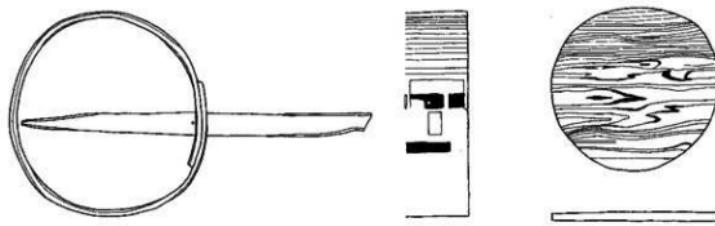
以上の遺物は瓦器などの土器類から13世紀後半～14世紀と考えられる。

溝230（第22図） 調査区南部で検出された東西溝である。幅0.6～0.9m、深さ0.15～0.20mを測る。埋積土は第1層灰褐色土、第2層黄灰褐色土の2層である。第1層より瓦器碗1点（28）が出土した。そのほか小破片として瓦器碗、白磁鉢、土師質鍋などがみられる。

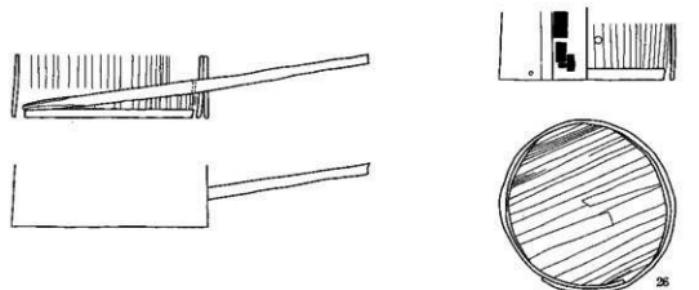
溝234 溝230に平行する東西溝で、西端は土坑231に断ち切られている。幅0.4～0.7m、深さ



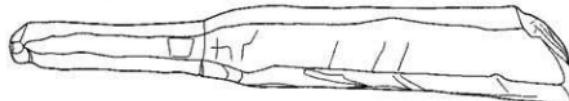
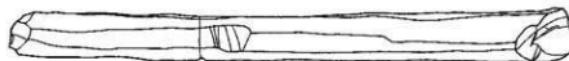
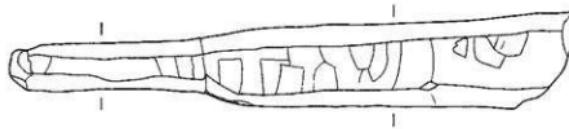
第20図 井戸228出土土器類



25



26



27

0 20cm

第21図 井戸228出土木器類 (25, 26 矛子, 27 叩き棒)

は0.2~0.25mを測る。埋積土は5層識別された。そのうち第1、2層には5~25cm大の礫が多數投棄され、これに瓦器類を中心とする土器片が若干混入していた。礫を投棄した状況は西の土坑231や233と似ている。

溝237 溝234の南側に平行して掘込まれた、幅0.6~1.0m、深さ0.1~0.23mの東西溝である。埋積土は灰色粘土である。西端が土坑233に断ち切られている。出土遺物としては須恵器壺の破片がある。

土坑110 調査区北東部で検出された不定形な土坑である。長軸2.01m、短軸1.43m、深さ0.1mを測り、淡灰色粘質土が埋積土である。瓦器碗、土師皿などの細片が出土している。瓦器碗は内底面に平行ミガキや格子ミガキがみられる破片がある。その他土師質羽釜片も出土している。

土坑113（第22図） 建物101の東、井戸228の西で検出されたほぼ長方形プランの土坑である。長軸4.1m、短軸1.34m、深さ0.18mを測る。埋積土は2層で、第1層は黄灰色粘質土、第2層は灰黄色のマンガン粒が沈着する粘質土である。第1層は地山粘質土であり、掘り終えてそれほど時間を置かずに埋め戻したようである。井戸228以前に掘込まれている。出土遺物磨耗した瓦器碗、瓦器小皿（30）、土師質羽釜の破片がある。瓦器碗は内底面平行暗文を施す。これらの遺物は13世紀後半~14世紀と考えられる。

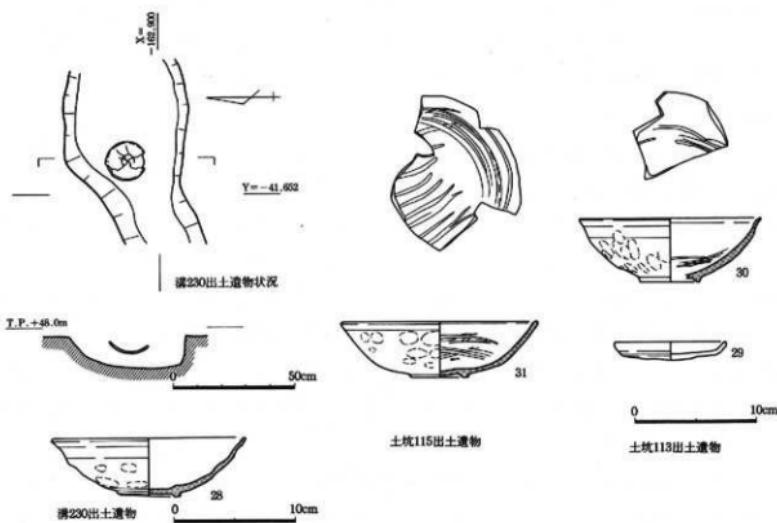
土坑132（第23図） 建物101と102との間に掘込まれた長軸1.6m、短軸1.3m、深さ0.07~0.09mの不定形な溜り状の土坑である。埋積土は4層識別され、出土遺物は北側に10~20cm大の礫が投棄され、南側では土器類の出土がみられた。出土土器類は瓦器碗、土師質羽釜、土師質小皿の破片がある。

土坑140 建物101の南側、土坑132の西側に掘込まれた不定形土坑である。長軸2.88m、短軸1.78m、深さ0.085mを測る。埋積土は淡灰褐色粘質土である。瓦器碗、羽釜の破片が出土している。

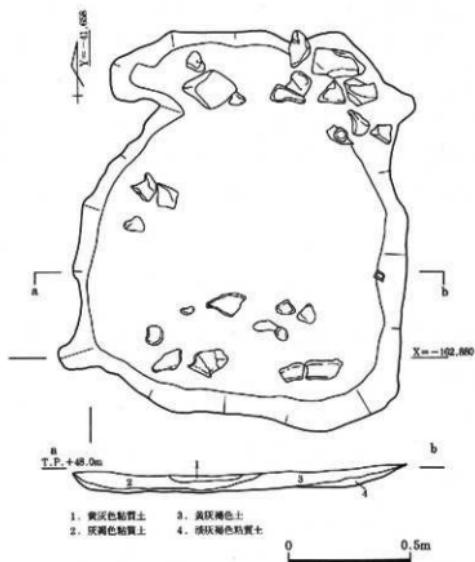
土坑155（第22図） 建物102の南辺を切って掘込まれた2.44m×2.35m、深さ0.11mの不定形土坑である。埋積土は淡灰褐色粘質土である。坑底面で建物102を構成するピット3が検出された。出土遺物には内底面に平行暗文を施す器（31）が見られる。その他土師質羽釜、白磁鉢、丸瓦の破片がある。

土坑203（第24図） 調査区南半の比較的遺構の希薄な東側に掘込まれた、ほぼ長方形の土坑である。長軸1.3m、短軸0.85m、深さ0.46mを測る。第1、2層を除いた段階で、土坑ほぼ中央でウシまたはウマの下顎骨の遺残が検出され、さらに掘り下げるにその下で瓦器碗が出土した。つまり、瓦器碗の上に下顎を載せた状態で坑底に置いたと考えられる。この瓦器碗と同じレベルで土坑の北東隅に別の瓦器碗が置かれていた。これらの遺物を取り巻く層は第1~3層の粘質土または粘質シルトとは違って、砂である。そして下顎骨や瓦器碗の内側に残る土は粘土であった。坑底面全体に炭、灰が溜り、木や獸毛の燃えた跡が認められた。

牛馬の頭部が井戸や建物に関連する祭祀に儀式として捧げる事例は知られているが、この場合



第22図 溝230出土状況および出土遺物・土坑113、155出土遺物



第23図 土坑132遺物出土状況・土層断面図 (S = 1/20)

も儀礼的行為としては同じような目的が考えられる。ただ、この土坑が北側の建物や井戸とも、また水場の池とも若干離れて、単独で掘り込まれている点が注意され、今後の検討課題とされる。

出土遺物は下顎骨を除けば、瓦器碗が2点(32、33)である。内底面に平行暗文を施し、周囲を粗くヘラミガキする。13世紀後半と考えたい。

土坑229(第24図) 調査区東辺中央に南北に長く掘込まれた不整な長方形土坑である。長軸6.64m、短軸2.44m、深さは最も深いところで0.35mを測る。埋積土は5層に分層された。第1、3、4層には地山の黄灰色粘質土ブロックを含んでおり、土坑掘削後の埋め戻しを反映すると思われる。坑底面にはほぼ全体に3~5cmの厚さで粘土の堆積がみられた。坑底面では建物102の西辺ピット6、7が検出された。出土遺物は全層にわたってみられたが、第1層を除去した段階で、土坑南隅を中心に、瓦器碗・皿、土師質羽釜・皿・甕・須恵器杯・白磁碗(37)・瓦などが疊に混在する形で比較的まとまって出土した。瓦器碗はすべて内底面に平行暗文が施される(34)。瓦器小皿は内底面に平行暗文のあるもの(35)、粗いラセン暗文のもの(36)である。13世紀後半~14世紀と考えられる。

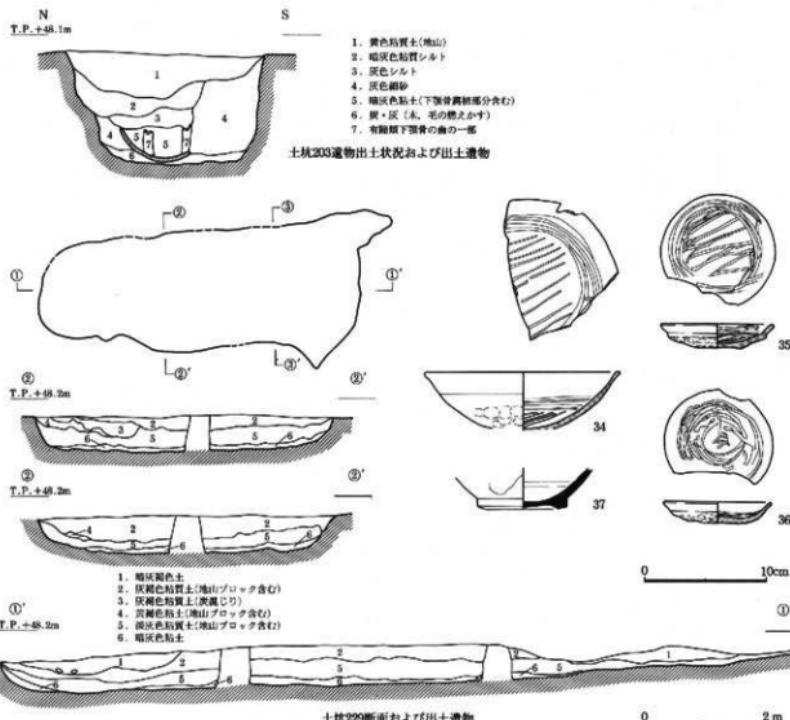
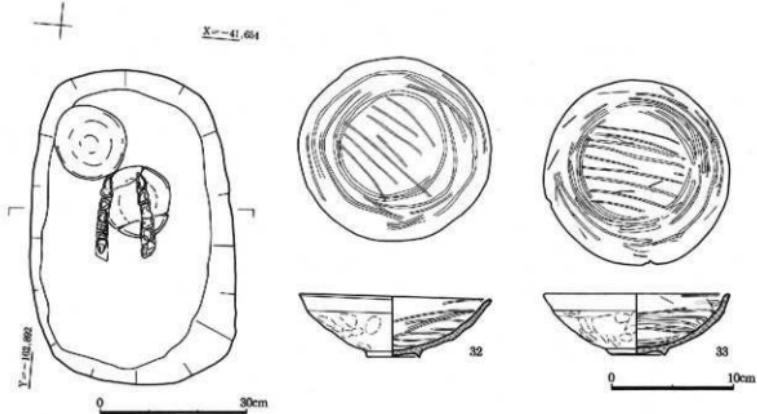
土坑231、232、233、235 いずれも調査区南西隅に集中して掘込まれた土坑である。深さ0.5mの土坑232を除き、他は深さ0.2~0.3mと浅い。埋積土はいずれも灰色粘土、黄色粘土、盛土として用いられた明黄色の山土が混在する。土坑231、233、235ではこの土に礫が混じる。出土遺物はすべての土坑から、瓦器碗・皿、土師質羽釜、須恵質甕・鉢、瓦の小片が出土しているが、他の中世遺構に比べ遺物の摩滅が著しい。溝234、237を断ち切っている。

ピット(第25図) 建物に伴うピットか、またはその他の施設のピットかどうか、検討を要するピット群があるが、その中には柱抜き取り穴を埋め戻す際、瓦器碗を投じた例がある(ピット174、192、214)。埋め戻しのときに意識的に入れたものであろうか。ピット174では3点の碗が重ねられていた。瓦器碗はいずれも内底面に粗い平行暗文が施されている。ピット192例(41)以外は、やや深みのある碗である。これらの瓦器は13世紀後半~14世紀と考えられる。

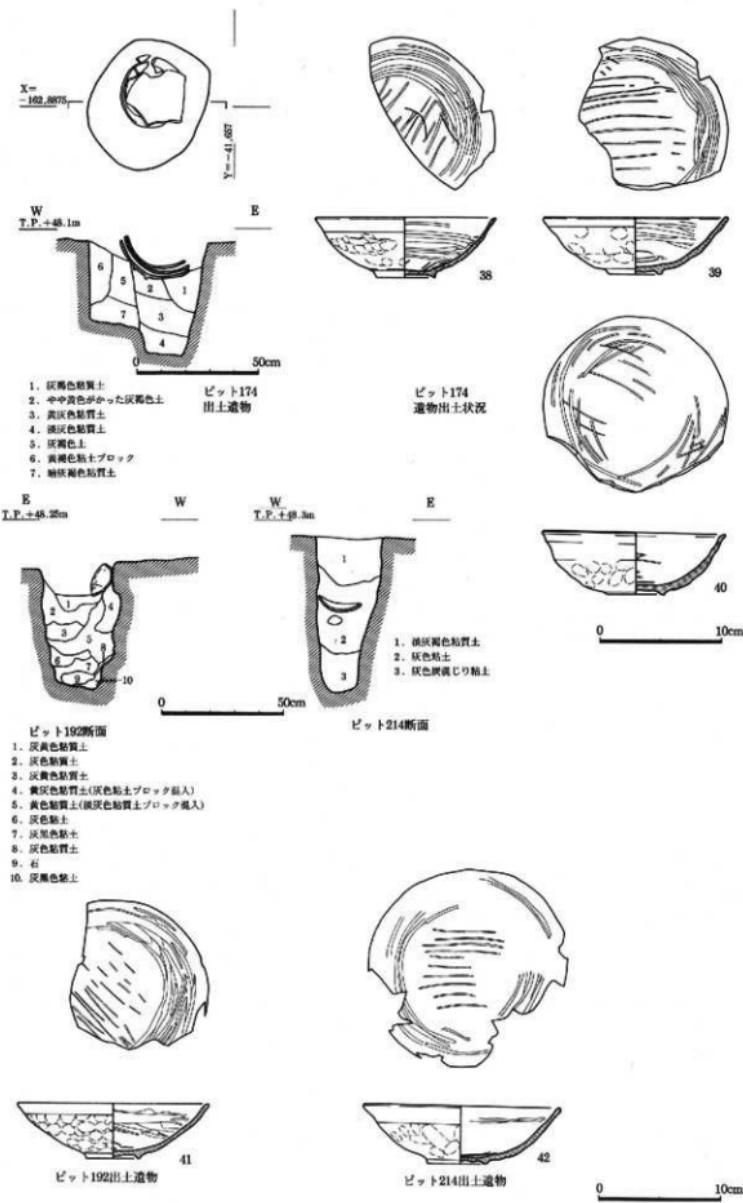
第5章 まとめ

今回の調査で検出された遺構で最も時期の遅るものとしては、A~C区を中心とした古墳時代前期の土坑014、溝004、019がある。またB区北半の中世包含層の中からは円筒埴輪片、さらに時期の遅る旧石器時代~縄文~弥生のサヌカイト剝片、石鏃が出土している。

時代が下ると掘立柱建物、井戸、溝、土坑、池跡などD、E区を中心とした中世遺構群があり、A~C区はこの時期耕作地となっている。この中世遺構群が現在の地割りに沿って調査区全体にわたり検出されるので、あたかも中世主体の遺跡との印象を受ける。しかし、それは中世の耕地確保に伴う大規模な開墾によって凹凸のある傾斜地が削平され、段状に整形を繰り返して現在みる平坦な地目に至った結果である。



第24図 E区土坑203, 229および出土遺物



第25図 E区ピット174, 192, 214断面, および出土遺物

たとえば、現在の地割りに軸をほぼ揃えたE区の遺構群の示す13世紀後半～14世紀以前の溝は、特にA～C区にみられるように、まだ旧地形に制約され、主には南東～北西方向をとる痕跡として検出される。A区の轍跡もこの方向に左右されている。B・C区の直角に曲がる溝もそれ自身には一定の企画性をうかがえるが、まだ旧地形に左右されたありかたである。

この旧地形は、たとえば陸軍測量図（第3図）にみられる陶器山丘陵北東に展開する北西方向の放射状の開析谷の流跡、つまり整然とした地割り以前の状態に近い。このような旧地形に起因する凹部分は大なり小なりなんらかの落ち込みの形でとらえられるが、それも中世の耕地の確保の過程で埋め立てられていく。C区の落ち込みで検出されたほぼ完形の黒色土器は当地におけるそのような過程の始まりを示しているのかも知れない。

13世紀後半を中心とする時期の遺構はほとんどすべて現在地図上にみられる東西南北の整然とした地割りのなかにおさまる。したがってこの時期に現在まだ周辺に残る旧来の村落の基盤が整えられたとみられる。E区を中心として営まれた生活の場（建物、井戸、その廃絶に伴う土坑など）、農業用水確保のために旧開析谷の埋没を利用した池など、すべてがこの方向に規制されている。特に、池の管理は15世紀頃には築堤、暗渠によって管理され始める。これらの作業によって南につづく開析谷との仕切りをつけ、連続するいくつかの池として活用されるようになったと考えられる。

集落のありかたとしては、池十ムラの単位として把握され、これは陸軍測量図上で読みとれる旧集落の分布状況とほぼ似ている。とくに西除川流域の東西に展開する地域に比較的整然と残る地割りのなかで、旧集落はほぼ池の傍らにセットとして点在している。このいわばパターン化した原形はこの時期まで遡ることができよう。つまり現景観の成立と考えてよいのではないか。そのような池十ムラのひとつの事例をE区で検出したと思う。ただし、この生活の場がさらに東に延び、南余部の旧集落に接近する位置を占めることは注目される。

松原泉大津線建設に伴って実施された日置荘遺跡の調査では、平安時代から中世に移る段階で集落が増加し、13世紀には鉄造遺構に示される手工業の発達が指摘されている。しかし手工業の発達にはまず農業生産の基盤整備が要件であることからすると、今回の調査区こそまさに西除川流域一帯の平野部で、小集落が飛躍的に増加しつつあった段階の遺跡に該当するとみなくてはならない。その小集落とは、旧開析谷の埋没過程を坪の区画に従って方形・長方形に整え、これによって一枚一枚の田畠に灌漑用水として供給し、かつその管理のために居住地をこの用水源である池端に求める、という構成が基本ではないだろうか。

特徴的な遺構として、D区池の最終堆積後の面で検出された、土師器小皿二枚1対3組の出土をみた小土坑252や、牛馬の下顎骨を出土したE区土坑203が挙げられる。この遺構が宗教儀礼的色彩の濃い性格をもつことは言うまでもないが、上記のような13世紀に入って顕著になる農業生産の高揚を背景に考えれば、やはりいずれも池傍または池傍のムラの中で行なわれた、大きくは農業生産の安定、向上を意図して行われた儀礼の痕跡といえるだろう。

報告書抄録

ふりがな	あまべいせき はっくつちょうさがいよう						
書名	余部遺跡（その1）発掘調査概要						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	折本哲、森屋直樹						
編集機関	大阪府教育委員会						
所在地	大阪府大阪市中央区大手前二丁目 06-941-0351						
発行年月日	1998.3.31						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °°°'	東經 °°°'	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
余部遺跡 (その1)	大阪府 南河内郡 美原町 南余部 281番地		34° 31' 51"	135° 32' 46"	平成9年 8月26日 平成10年 3月31日	8,500	府営住宅 建替工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
余部遺跡	集落	鎌倉 室町	掘立柱建物 木樋	瓦器・瓦質土器 陶磁器			

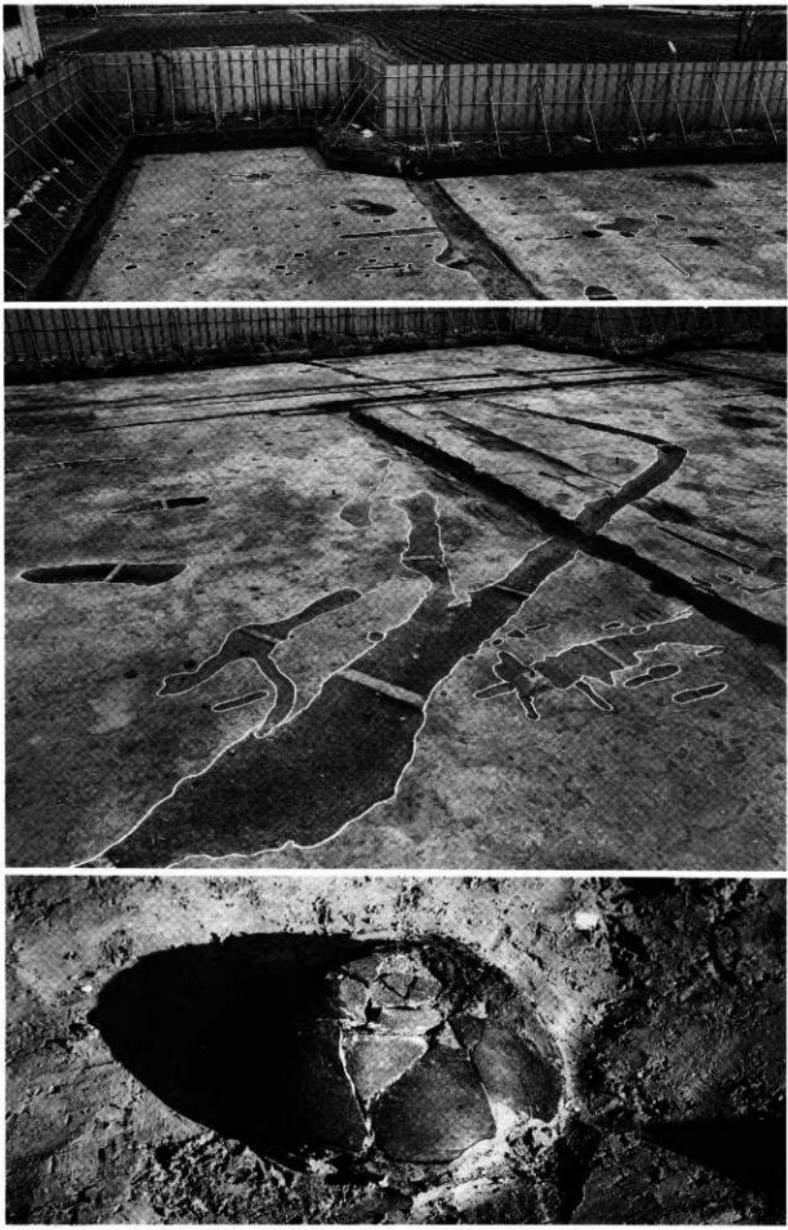
図 版



A～C区南東部（東から）



A～C区北西部（東から）



(上) A～C区南西部柱列 (中) 同、北部溝037 (下) 同、東部落ち込み遺物出土状況



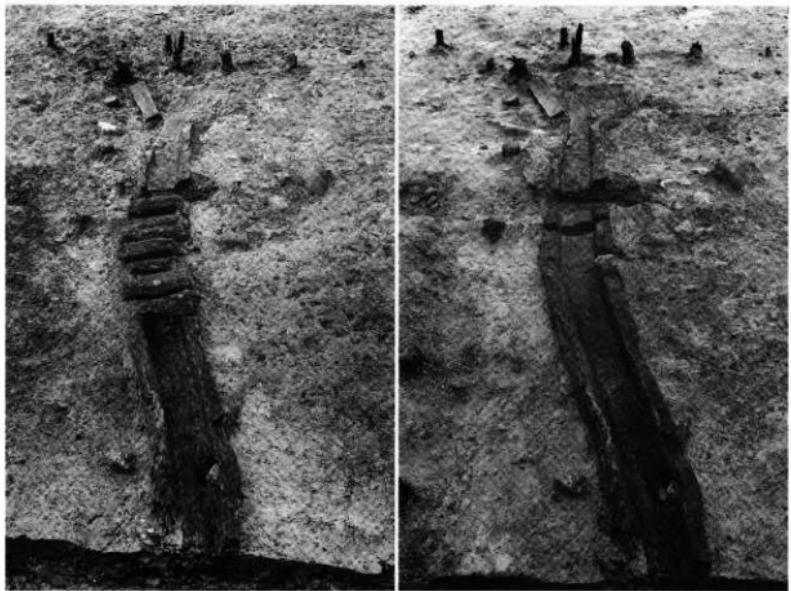
(上) D区渓路跡全景(南から) (中) 同、南部東西杭列 (下) 同、南部小土坑252



D区北壁断面（南から）



D区流路跡北側断面（北から）



D区南部木構出土状況（左、検出状況、右、被覆材除去後）（南から）



(上) 木構被覆材 (下) D区南壁断面木構部分 (北から)



E区全景（北から）



E区建物102（西侧から）



E区建物101（西から）



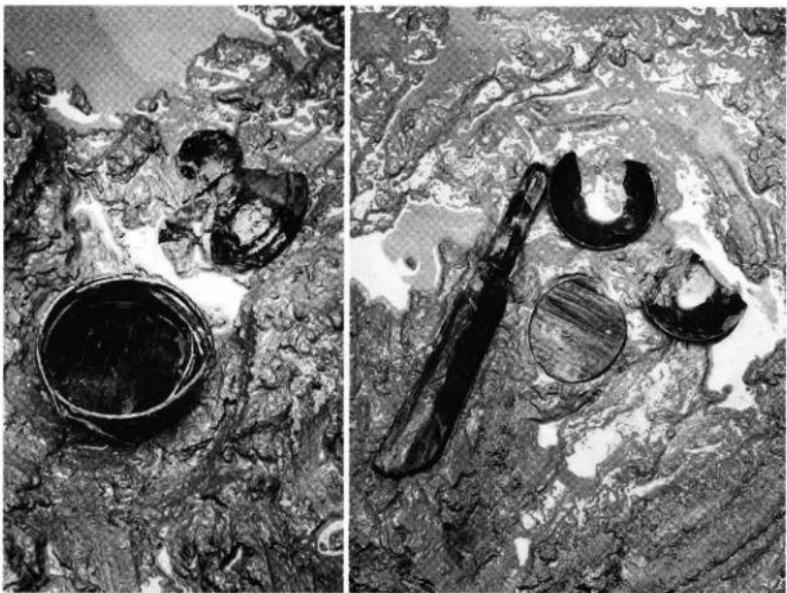
(左) 建物101ピット8



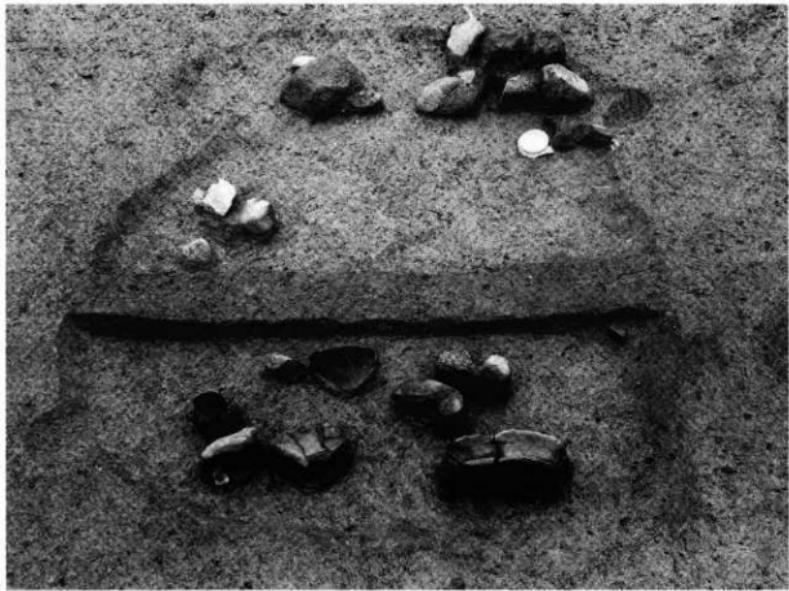
(右) 同、ピット7



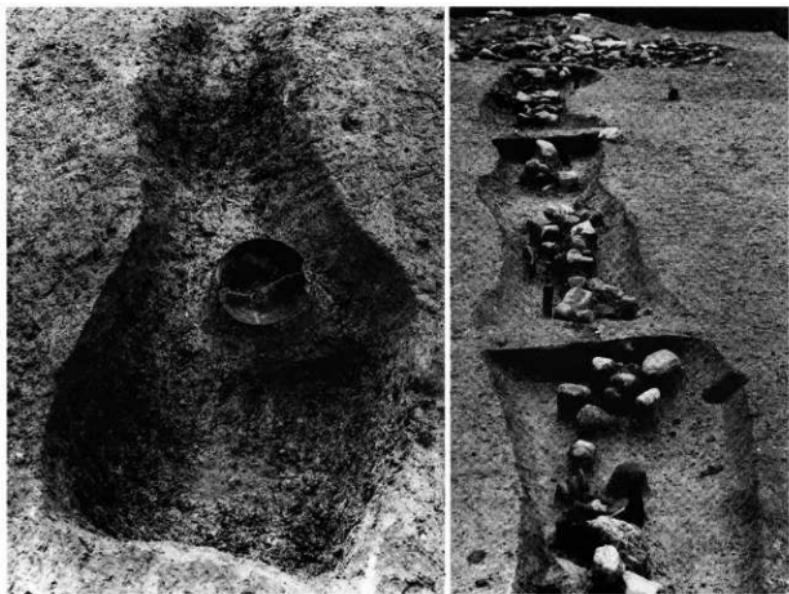
E区井戸228遺物出土状況（南から）



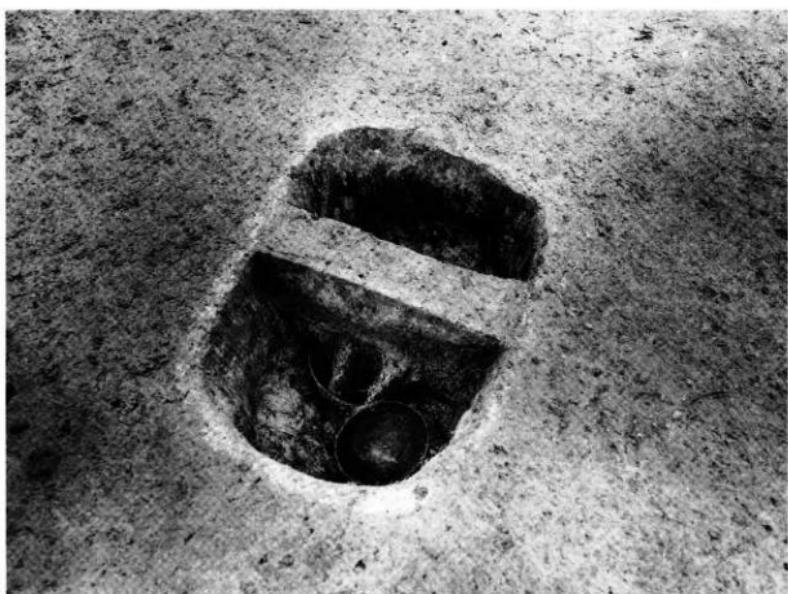
同、灰黒色粘土内遺物出土状況（左 T.P.46.214m、右 T.P.45.742m）



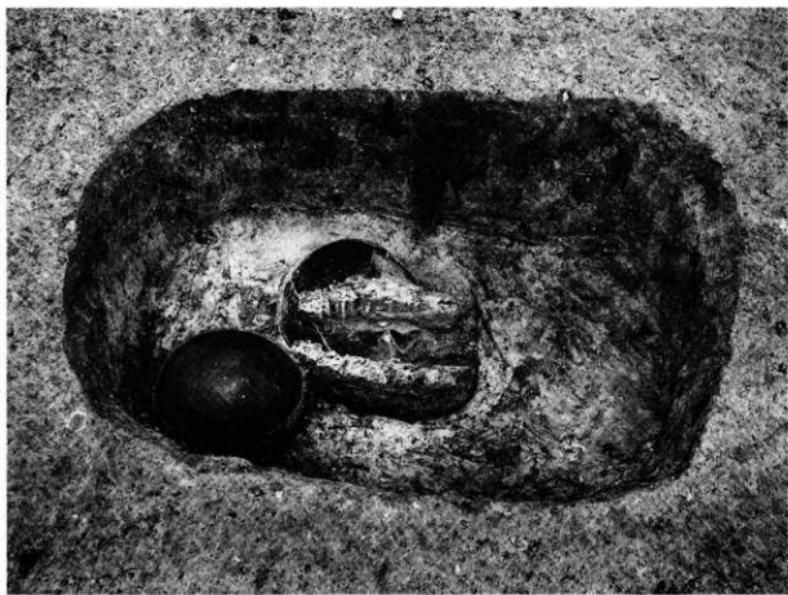
E区土坑132遺物出土状況（南から）



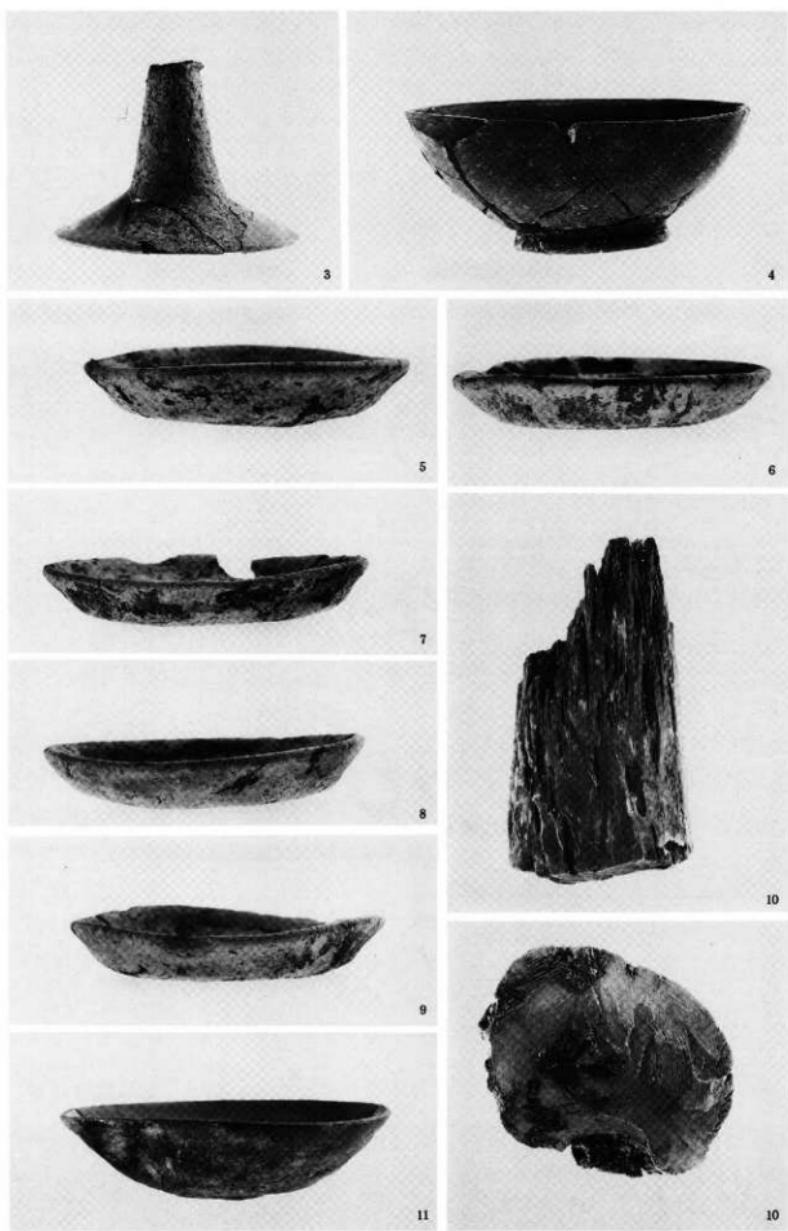
同、南半部 左、溝230遺物出土状況（東から） 右、溝 溝234（東から）



E区土坑203（東から）



同、遺物出土状況（北から）





12



13



14



15



16



18



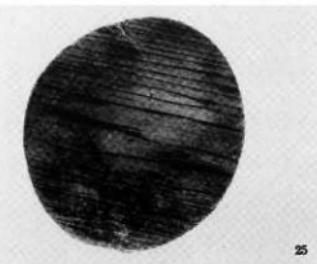
19



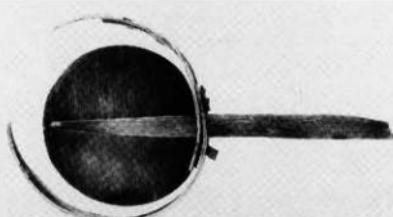
20



22



25



25

